

Nikolai Bogduk, Lance T. Twomey 著

四宮 謙一 訳

腰椎の臨床解剖

(B5変型 164頁 3605円(税込み) 1989年 医学書院 刊)

岩倉 博光

(帝京大学医学部リハビリテーション部)

腰痛の治療には各国で予想以上に多額の治療費を費やしている。たいていの成人が、短期間にせよ腰痛を経験しており、中には慢性化するものが少なくない。ところが、多数の臨床家が承知しているごとく、この腰痛の原因を探り、病理を明らかにしたり、正確な臨床解剖学および機能的診断をくだすことは極めて困難である。

腰痛の原因の大半(約90%)は、腰椎部に存在すると考えられている。その椎体は周囲の筋群によって支持され、各椎体間には後部に多数の靱帯があるほか、前縦靱帯や後縦靱帯が椎体と椎間板の前後と付着する。痛みはこれらのいずれの靱帯や骨膜からも生じるし、また椎間関節(滑膜関節)からも発生しうる。筋肉や椎間板周囲の血管に分布する神経や、馬尾から出る神経根の圧迫も、もちろん腰痛の原因となりうる。多数の研究

者がこの問題の基礎的研究に取り組み、ようやく近年に至り腰椎部の生理と病理の知見が増加したために、腰痛の謎が徐々に解明されつつある。

「腰痛の臨床解剖 Clinical Anatomy of the Lumbar Spine」(四宮謙一訳)は、数々の腰痛に関する情報を集めて、腰椎の構造、機能、そしてよくみられる疾患を理解させることを試みた親切な教科書である。一方では研究にも役立つ卓れたガイドブックでもある。

本書は、著者らが目標とした卒前、卒後の医学教育(理学療法士など関連専門職を含めて)の資料として適しており、また最近の豊富な知見を基礎とした臨床解剖学が随所に展開されているために、若い医師たちを研究に導く参考書としても利用できる。こうした人のためには文献のリストが用意されている。

解剖学のテキストと思って読んでいくと、すぐに生体力学の原理が説かれており、さらに進むと腰椎の神経支配と血流供給について述べられている。

実地臨床に従事するものにとって読みごたえがあるのは、腰痛症候群に関する基礎と臨床の連携する章であろうか。神経を有する腰椎の構造物として、椎間関節、靱帯、脊柱筋、硬膜、それに椎間板が存在するが、これらの多くは個人的見解や経験的な事実に基づいたもので、それらを立証するための必要な実験的根拠を集めるために、過去の半世紀を要したと述べられている。

腰椎の臨床解剖に関する知見は、その量と質において従来教えられてきたものを大きく越えている。本書はその意味で時機を得たものであり、腰痛患者を診察するものに基礎的な知識を具体的に記したものである。

記述はわかりやすい図を多用して理解を助けている。現在研究中の医師を含め、医学生、理学療法士、臨床医と幅広い読者に受け入れられるに価するものと推せんしたい。